

就職活動場面における被援助志向性および友人からのサポート受容と精神的健康の関係

藤野 真行

就職活動は、大学生にとって社会人として自立していくための重要な移行課題である。下村・堀（2004）は、就職活動を進める上で友人との相互協力的でサポートティブな関係が望ましいことを指摘しており、就職活動中に得られる友人からのソーシャル・サポート（以下、サポート）は重要であることが考えられる。しかし、妹尾（2016）は就職活動中の大学生は他者と比較することで焦りや不安を感じながら就職活動を続けていることを示唆している。実際、友人からのサポートはポジティブな効果だけでなく、就職活動に関する不安や満足感にネガティブな効果を及ぼすことが明らかにされている（赤田・若槻，2011；水野・佐藤，2014；下村・木村，1997）。友人からのサポートがネガティブな効果をもつ要因の1つに、評価懸念がある。菅沼・古城・松崎・上野・山本・田中（1996）は、評価懸念のない友人よりも評価懸念のある友人からの実行されたサポートがストレス反応を高めることを明らかにした。しかし、サポートによるネガティブな効果があっても友人からのサポートは内定獲得や精神的健康を促進する上で必要であり、同時に自らサポートを求めることもまた必要である。本研究では他者にサポートを求める指標として、被援助志向性を取り上げる。被援助志向性の高い者は他者へサポートを求めることへの抵抗感が低い、つまり評価懸念が低いことが考えられる。反対に、被援助志向性の低い者はサポートを求めることへの抵抗感が高い、つまり評価懸念が高いことが考えられる。本研究の目的は、就職活動終期におけるサポート受容者の被援助志向性と友人からのサポート受容（平均サポート）が精神的健康と満足感に及ぼす影響を検討することであった。

被援助志向性（L・H群）×平均サポート（L・M・H群）の2要因分散分析を行った。その結果、全対象者では試験不安で交互作用の効果がみられた。被援助志向性の低い者は“1 ストレス状況当たりの友人からのサポート受容”である平均サポートの多少は試験不安に影響を及ぼさないが、被援助志向性が高い者にとって平均サポートが少ないことは試験不安を高めてしまうため、平均サポートを多く得る必要があることが明らかとなった。

男性の場合では、試験不安と就職活動に対する満足感で交互作用効果がみられた。被援助志向性の低い者が平均サポートを多く得ることで、被援助志向性の高い者の試験不安の程度まで高まることが示唆された。女性の場合では、交互作用の効果はみられなかった。以上の結果から、本研究の仮説1、2の一部が支持された。本研究は、就職活動終期における大学生の就職支援の望ましい在り方を検討する上で、性別と被援助志向性の程度、就職活動に関する不安の種類を考慮する示唆を提供した点で意義があるだろう。

Keywords：被援助志向性，ソーシャル・サポート，精神的健康